

大雨につよい 快適な街づくり





なぜ浸水被害は多発するの？

下水道が整備されているのに浸水被害が多く発生しています。

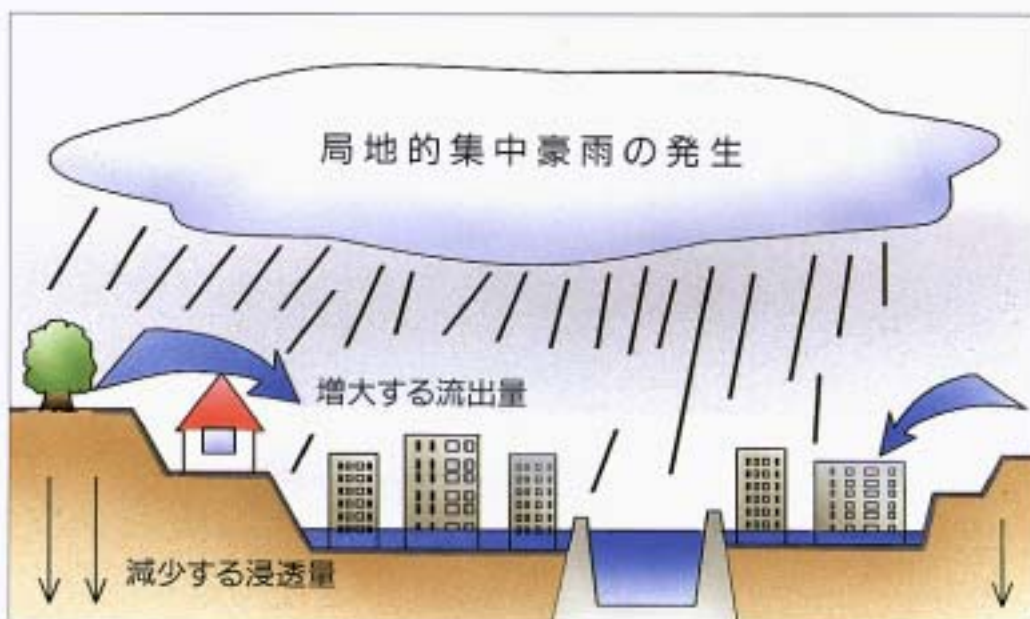


浸水の多発する原因

- 浸透区域の減少
- 人口の集中



- 降雨形態の変化
- 産業構造の変化



大雨の被害ってどのくらい？



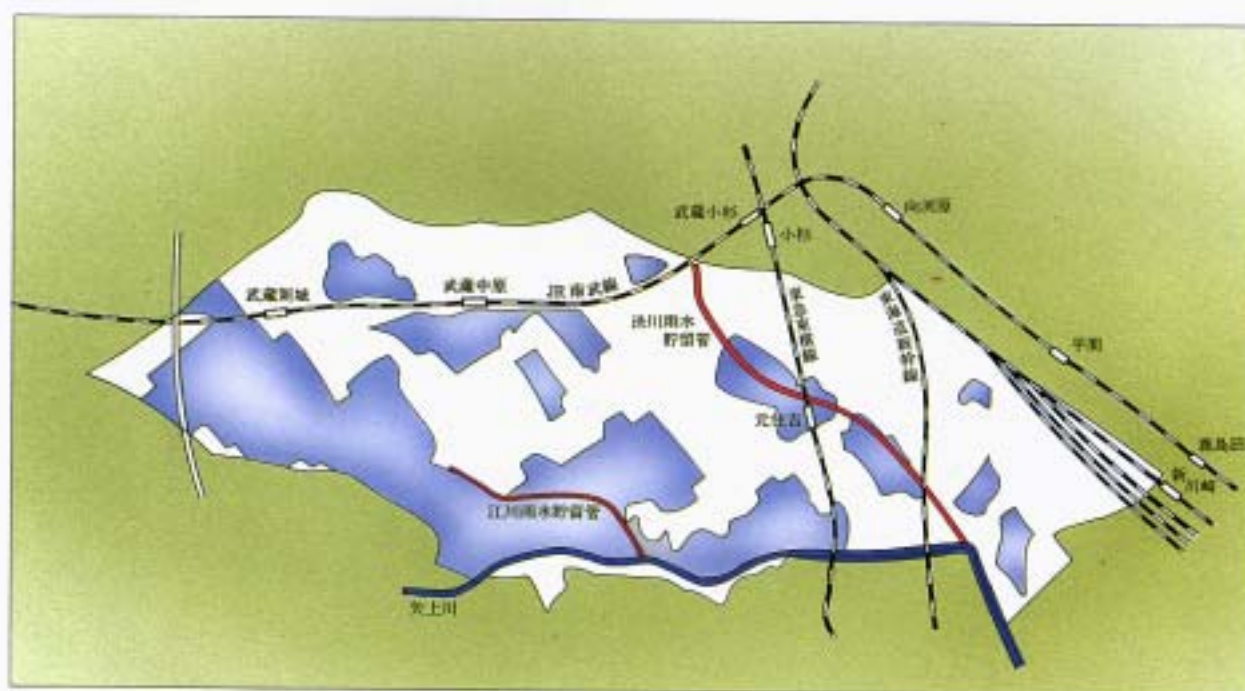
ひとたび浸水被害が発生すると、その被害は莫大なものになります。
渋川・江川雨水貯留管の区域では対象面積の約5割に被害が発生
しています。



浸水の様子(昭和57年9月台風18号)



(平成6年9月集中豪雨)



渋川・江川雨水貯留管の浸水実績図

鶴見川総合治水対策

川崎市と横浜市のあいだを流れる鶴見川は流域の都市化の進展が予想以上に進んだため、川的能力以上の雨水が流入するようになり、浸水被害が多発しています。

河川の拡幅を行うには、周辺に住宅等が密集しているため限度があり、街を浸水被害から守るためには、河川と下水道が協力して総合的な治水対策を策定する必要が生じ、昭和56年4月に鶴見川の管理者である建設省と流域の都県市が協議し鶴見川総合治水対策が策定されました。

その主な内容は、

1. 流域対策の実施にあたって河川・下水道の役割分担を定める。
2. 保水地域・遊水地域・低地地域の設定。
3. 流出量の増大に対処するため、河川・下水道の流量分担を定める。

鶴見川総合治水対策における河川と下水道の役割分担

下水道の役割	内水排除規制、雨水貯留管の建設 レーダ雨量情報システムの建設 開発行為等の流出抑制指導
河川の役割	河道整備、遊水池の建設 放水路の建設 開発行為等の流出抑制指導



川崎市総合雨水排水対策における下水道計画

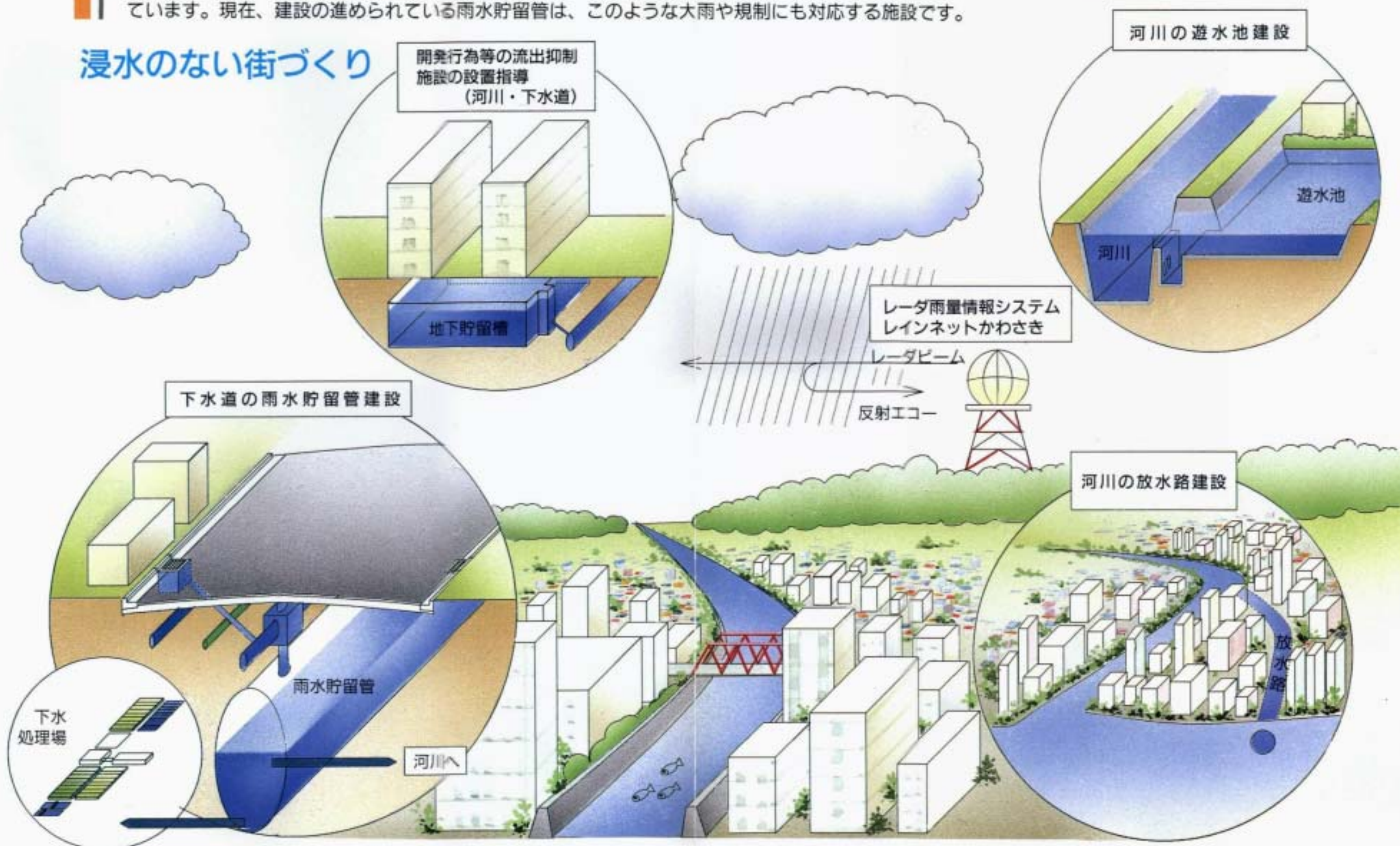


21世紀にむけて浸水のない街づくりをめざし、下水道局と土木局（河川担当）が協議して総合雨水排水対策を策定しています。鶴見川流域では上位計画である鶴見川総合治水対策に基づいて総合雨水排水対策を策定しました。

現在、下水道施設は52mm/hr対応施設（5年確率）の整備がほぼ完成していますが、頻発する浸水から市民の貴重な財産・生命を守り、浸水に対する安全度を向上させるために、58mm/hr対応施設（10年確率）の整備を進めています。

渋川・江川地区では鶴見川総合治水対策で、河川水位が計画高水位に達した時点でポンプの運転を調整する（内水排除規制）こととなっています。現在、建設が進められている雨水貯留管は、このような大雨や規制にも対応する施設です。

浸水のない街づくり

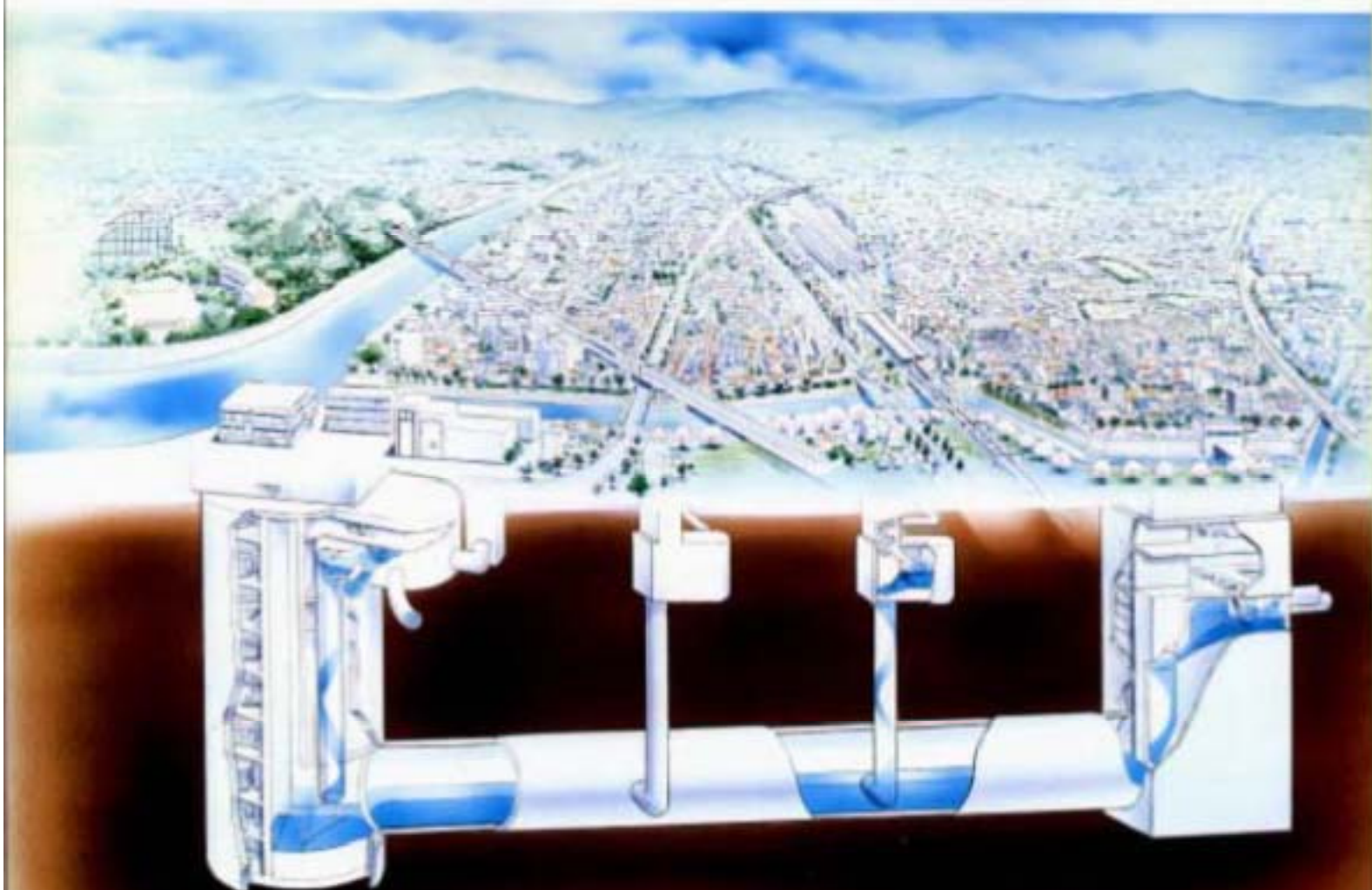


見えないところで下水道はがんばっています

都市化の進展にともない川の拡幅が困難な状況です。このため街を浸水から守るには、降った雨をより速く川へ流すことから貯めることへと変わってきました。

大雨から市民の生命・財産を守るために、渋川・江川雨水貯留管のほかに大師河原・戸手雨水貯留管など降った雨を貯める施設や、雨の状況を予測するレーダ雨量情報システムを建設しています。

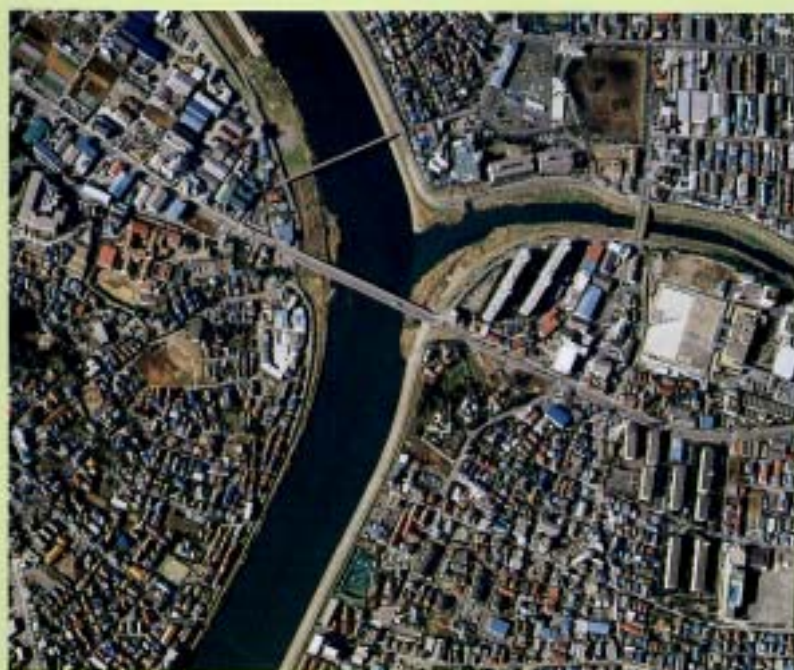
大規模雨水貯留管が浸水の危機から街を守ります。





1963年当時
矢上川周辺の様子

1993年現在
過密化した矢上川周辺
の様子



市民の花「つつじ」

このパンフレットのお問い合わせは
川崎市下水道局建設部計画課
☎(044)200-2111



市民の木「つばき」